老作家の印象

山崎剛平

著者略歴

明治34年6月2日兵庫県赤穂郡上郡町市町現住所ニテ生。竜野中学ヲ経テ早稲田第一高等学院入学（新制第一期生）。大正15年早稲田大学国文科卒。昭和9年東京上野桜木町ニ移住。翌10年10月10日砂子屋書房開始（文芸専門）出版。昭和20年書房閉店。終戦直前郷里ニカエリ今日ニ至ル。

著書　歌集『挽歌』小品集『水郷記』『若き日の作家——砂子屋書房記』他。

老作家の印象——砂子屋書房記——

1986年7月20日　初版発行　　定価3000円

著者　山崎剛平

発行者　田村雅之

印刷所　金井印刷

製本所　並木製本

発行所　東京都千代田区内神田 3-4-7　砂子屋書房

© Gōhei Yamasaki

山崎剛平

老作家の印象

砂子屋書房記

砂子屋書房

目次＊老作家の印象

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

徳田秋声

徳田秋声『灰皿』 10
秋声随筆の一特色 18
花袋秋声生誕五十年祭 22
秋声追憶点描 27
追記 40

田山花袋

田山花袋聞書抄 48
田山花袋の軸 60
田山花袋と家庭 66
田山花袋雑記 71
後記 77
再後記 86
再々後記 89

国木田独歩

国木田独歩聞書抄　98
国木田独歩の一書簡　108
国木田独歩の終期　114
茅ヶ崎病院の独歩　118

岩本素白

山居俗情　134
素白書簡十一通　146
書簡略註　158
書簡連想　167
日誌連想　169
拾遺一束　175
余談一束　190

秋艸道人

秋艸堂の一夜　212
ぼくの秋艸道人　233
書簡補註　241
書・歌・美術　248
斎藤茂吉
良寛の一首　270
「なかりけり」　282
寂蓮の一首　289
空穂会　306
解説　森直太郎　318
題簽　頴田島一二郎

老作家の印象

——砂子屋書房記

德田秋声

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

徳田秋声『灰皿』

『灰皿』は秋声さん中心の雑誌「あらくれ」に連載された随筆に、その頃（昭和十年～十三年）のものを併せた随筆集で、その序文にも書いてあるように、私の懇望によって出すことが出来た。蒐集は一穂さんによる。古いものは散佚して了っているようだが、秋声さんは随筆類を軽く見るというより白眼視する趣きさえあるため、これらも又、少し経つと紛失してしまう恐れがあるから。取敢えず一冊纒め得られてよかったと思った。

『思ひ出るまゝ』（昭和十一年文学界社刊）は文芸春秋に連載されたもので、半自叙伝風な趣きもあり、（半、というのは初期、二十代中心のもの）纒った一長篇で、恰度連載長篇小説が終って本になったのと同じようなものだった。雑誌で愛読して来た私には本になったのが嬉しかった。「あらくれ」連載のものが溜れば今度は砂子屋で出させて頂きたいと思い、言いもしていた。それが「あらくれ」の廃刊で実現決定となったわけである。『灰皿』とは「あらくれ」連載随筆の題で、一冊のうち三分の一未満程度で終った。――古い随筆類を集めれば『灰皿』程度の本は少くとも五冊位はある筈である。秋声さんは気乗り薄だが、私などには楽しいし、それに有意議でもあるので、せいぜ

い蒐集に努めたく、一穂さんにも協力を願った。しかしその方は手のつかぬままに過ぎ、長編小説『心の勝利』(昭和十五年刊)を出すことが出来ただけで、漸次戦時色の深まると共に希望も薄らぐことになっていった。

○

「四名家第一印象」という題の一文中、左のような一節がある。

——或る時西本波太郎氏の出してゐた趣味といふ文芸雑誌の発行所で、藤村氏や小山内氏や水野葉舟氏などと落ち合つた時、小山内氏がなぐり書きのその小品に讃辞を呈してくれたことをおぼえてゐた。素より今それが見つかつても詰まらないものに違ひない。

(註。右の「なぐりがきの小品」とは、能の「小原行幸」を観て得た印象が、二葉亭訳『血笑記』に共通な感情を覚えて、「その時の心の印象を移した」小品。——ということが前文でわかる。)

「つまらない」と秋声さんは言っても、その小品は現に小山内薫も褒めているし、必ずや好篇であるに違いあるまい。そして、そんなことが判ったのも次の一随筆が残ったためである。この種の文章が昭和十年以前は殆ど全部散佚して了っているのだ。

西本波太郎とか「趣味」という誌名などは、窪田空穂先生の独歩追憶に出た「白鳩社」とか「山比古」などに似て古い人からでないと聞けない名である。そして、そんな「文芸雑誌」の「発行所」に集る顔振れがまた楽しい。私は一般読者より少し特殊かもしれないが、少年時代何かで読んで知

っていた――小山内薫と水野葉舟が往時文壇での美男の双璧だったと。葉舟の『郊外』という小品集は少年の私の愛読書だった。後、歌集『明暗』も愛読した。古い雑誌類に時々見る葉舟の名は私には、私だけには特に懐しいものだった。小山内薫の方は築地小劇場時代の華やかな清新さが特に印象的で誰にもよく知られているが、私には空穂先生の『忘れぬ中に』（昭和十三年刊）の前記「山比古」同人となった時の小山内薫が「都々逸を作ってみたことはあるが、その他のなにもやったことがない」状態だった、という話を直ぐ思い浮べるので、それだけ人一倍楽しい感慨である。

「四名家第一印象」というのは、永井荷風、高浜虚子、夏目漱石、菊池寛の四人に、夫々最初に会った時の印象を述べた一文であるが、その叙述の中に、派生的に記されたのが右引用の一節である。謂わばお添えもののような一節であるため、粗読者には読み落さないまでも軽く読み過ごして直ぐ忘れて了いそうな所であるが、そんな部分でさえも十分楽しく意味深く貴重文献でもあるのだから、他の四名家に関する夫々の追憶記録の貴重さは思いやられることだろう。

○

『空穂随筆』（昭和十一年章華社刊）のうちの「明治三十七年時代の就職運動」に、卒業前の学生である先生と吉江さんとが池辺三山を訪問した時の所。三山の話のうちに、文章ばなしとなって、

――尾崎紅葉の訳した「鐘楼守」あれも好く訳してあつた。私は原文と対照して読んで見たが、ところ〴〵原文以上の所があつて、読んでいると涙が出た。尤も後半はずつと劣つて、同じ人

の文章とは思へん位だつたが。

とあり、三山がそんなものをそれ程忠実に読み翫味することに驚いた、と言ってその後、

——しかしそれについての内輪話は聞いてゐた。訳者は尾崎紅葉になつてゐるが、実は長田秋濤氏で、紅葉は加筆しただけだとの事である。いま三山氏の云はれた評は、まさにそれを裏書して居るものであつた。

というところがある。この「内輪話」は勿論、訳文の上半がよく下半が拙いということも、文芸畠の方では、常識という程にまでよく知られていたのではなかったろうか。右のような記事は古い文芸雑誌類にも時に見られたものかもしれない。

がこの尾崎紅葉訳、長田秋濤訳云々に就いては、『思ひ出るまゝ』の最後の方に、特別詳細に往時の実情が述べてあり、恐らくそれによって世人は初めて真相を知ったことと思われるが、秋濤訳は紅葉加筆でなく全部が秋声加筆だったのである。少し抜いてみる。

——この秋濤氏も、先生が病気になつてから、厚い友情を寄せた一人で、氏は予ねて持つてゐたノートルダーム・ド・パリの翻訳を先生に提供した。

秋声さんは塾生時代紅葉の命によって長田秋濤の翻訳口述を写しそれを文章に綴る仕事をした。コッペの『王冠』『怨みの花束』など。秋濤寓居に籠って。後者は読売新聞に『金色夜叉』の間の繋ぎとして多分紅葉名で掲載された。紅葉は病気のため『金色夜叉』は途切れ勝ちで、遂に未完に終ったことは世人周知である。

『鐘楼守』はその後のことである。物を書かなくなり、経済的にも困って来た紅葉への病中見舞品だった。――同じく病中を見舞った博文館主大橋新太郎は先に紅葉全集を出したが、印税は後年と異って一時金で、袖珍版はいくらよく売れても紅葉の方へは金は這入らない。（註。版権著者に在りと確定したのは花袋の『蒲団』裁判以後の事。前田晁『明治大正の文学人』（昭和十七年砂子屋書房刊）参照。）『鐘楼守』奉納は大きな経済援助だった。秋声さんはその晦渋な文章を英訳本を見ながら直していった。努力を重ねて半分程まで続けた。

さて――鐘楼守のことだが、あれが秋濤氏の知つてゐる或る青年の手に成つた翻訳であるといふことを言つたところで、既に時効にかゝつてゐることだから、暴露にはなるまいと思ふ。無論早稲田出版部に対しては済まないことになるが、紅葉先生があれを訳するだけの語学力のなかつたことは世間周知のことだし、（略）「金色夜叉」さへ書き継げないのに、丸で畑のちがつたユウゴオなぞを訳する興味をもつ筈もないのである。

と「代作」の章に書いてある。病床の独歩は代作を難じていたが、印税制度の変り目以前のことで、秋声さんは代作に関して同情的であり、漱石の場合と較べて紅葉の不運を言っている。（註、漱石、紅葉は同年。）

鐘楼守が長田氏によつて提供されたことは、兎も角大きな功徳であつたし、早稲田の人達――市島、高田両氏であらう――が、それを千円で買つてくれたことも、感謝していいと思ふ。

以上で「鐘楼守」のいさきつは十分判明したわけだがついでに加筆の詳細を添えて置こう。

先生はこの原稿に筆を入れはじめたが、それも最初の十枚くらゐで、所々文字を訂正し、語尾を先生流に直したのである。それの加筆訂正は私が先生に吩咐かつて遣つたのだが、私にも屢々難解の箇所があつて、英訳を一本側に供へて、怪しいとおもふ箇所は比べて見たりしたが、こつちの方が余程怪しいので、随分勉強してやつたには遣つたが、根の尽きる仕事ではあつた。第一生活が非常に苦しかつた。

これで、もう十分であろう。長田秋濤は自分でヂカには訳筆を執らなかったようである。秋声さんが麻布で口述を書いていた頃の文章には秋濤の生活状態だけでなく素性経歴まで述べてあり、簡略ながら一特殊人物が描き出されている。

右は『鐘楼守』に関する誤伝訂正ということに就いて言ったのであるが、この一例だけでも秋声随筆の貴重であり優秀であることが判る。私が随筆を尊重する所以である。

○

『灰皿』序言。——秋声さんの随筆観に就いては既に触れたが、念のためその所見を再録して置きたい。

私は随筆文学を余り好かない。俗間の俳諧、書画、茶の湯、造庭、盆栽、音曲、囲碁などと同列に日本人の隠微な道楽の一つに数へることも出来るとくらゐに、若い時代には思つて来た

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.